



脱原発世界会議 2012YOKOHAMA 企画報告書

ふくしまの部屋

～ふくしまを「聴き」、ふくしまと「出逢い」、ふくしまと「つながる」

文責:渡辺瑛莉(国際環境 NGO FoE Japan)

◆日時・場所 1月14日・15日(315)

◆企画参加人数:延べ約 350 人

◆主なファシリテーター:

- ・ 廣水乃生(コミュニティファシリテーション研究所代表)
- ・ 黒崎晋司(株式会社黒崎事務所代表)
- ・ 赤塚丈彦(セブン・ジェネレーションズ代表理事)
- ・ 桐山岳大(プロセスファシリテーション・プロジェクト代表)
- ・ 安田みゆき(サマンサ株式会社代表)
- ・ 渡辺瑛莉(国際環境 NGO FoE Japan スタッフ)

※その他多くのファシリテーターにサポートしていただきました。

一命は地球より重い

一今ここから いのちは美しい

一希望を持ち続ける

一やさしい光に私もなりたい

一前を向いてともに生きていける社会・地球をつくりましょう

一明るい未来を子どもに残す、つながればきっとできる

これは、2日間のふくしまの部屋での最終企画を終えたとき、参加者の方々が残してくれた言葉です。

ふくしまの部屋では、福島の人たちが直面している現実や想いに耳を傾けること、そして、共感した人どうしがつながることを目的として、福島からの参加者、避難中の人、全国からの参加者が様々な形で対話を行いました。

2日間を通じて、ここに全てを書き尽くせない実に多様で厳しい現実、福島の人々が直面されている苦悩や葛藤が語られました。時間の制約があり、語り尽くせなかったという参加者の方も大勢いらっしゃったことでしょう。

それでも、対話を通じて、共感した人どうしの出逢いや相互理解も生まれました。また、2日間の対話を終えたとき、ひとりひとりの心の内側に小さくてやわらかい光が自ずから灯ったような、個人個人が秘めている可能性が内側から感じられたような、そんな雰囲気にも包まれていました。また、その小さな光は、一人ではなく皆とつながっている感覚と、ともに未来へと踏み出していけるという希望を携えていました。冒頭の

参加者の方々の言葉はそれを表しているといえるでしょう。

2日間のプログラム

◆1日目午後:若もの会議

11月に開催されたふくしま会議でワークショップを行った福島大学大学院生を中心としたもちこみ企画。詳細は、別途報告をご参照。

◆1日目夕方:出逢い&交流会×2回

冒頭で福島の方々から県内の状況、必要な支援などについて短くお話を伺う。次に、福島の人を中心に小グループが作られ、さらにお話を聞きたい人どうしで、語り合った。福島のような状況に応じた情報交換により、「今後の活動のヒントがたくさん得られた」「こんなに応援してくれる人がいることがわかって嬉しかった」などのコメントを頂いた。

◆2日目:ふくしまダイアログ【広げる】／【深める】

【広げる】では、小グループに分かれ、福島の方々が抱えている葛藤に耳を傾け、全体でも共有した。【深める】では、一つの円となって、福島の方々のお話を聞いた後、ある葛藤を取り上げ、ロールプレイを行った。

以下に、2日間を通じて聴かれた声の抜粋と、【深める】対話の時間で起きたことについて概要を述べたいと思います。

2日間を通じて聴かれた声(抜粋)

<変わぬ厳しい状況、本音が語れない>

- ・ 福島はまだまだ3.11から変わっていない。
- ・ 何とか食いしばって生きている人たち、首根っこ押さえられて本音が言えない。
- ・ 現実が厳しすぎてまともに語れない。伝えられない。コミュニケーションが取れない。

<健康、体、子どもたち>

- ・ 自覚症状が出始めている。どんどん体の機能が奪われている。
- ・ 低線量被ばくについて答えがない。自分を知ることさえできていない。
- ・ 国が認めていない地域の子どもたちは今も放射能を浴び続けている。安全かどうか判断するのは私たち。
- ・ お母さんたち疲れきっている。耳をふさいでいる。でも子どもが外にいない。
- ・ マスクをする、給食を食べない、自分を守ろうとすると非国民と言われる。
- ・ 人権無視、避難の権利がない。僕たちはモルモットなんですか？

<異なる立場間の対立・葛藤、家族の分断>

- ・ 原発の話をする、離れ離れの夫婦でけんかばかりになる。
- ・ 避難？それとも居続ける？表面上は対立。でも、実は想いは同じ。子どもを守りたくない親はいない。
- ・ 親・子・孫、3世代がバラバラになってしまった…いつになったら帰れるのか。
- ・ 危険とわかっているけど、福島に戻りたい。

<雇用>

- ・ 福島の野菜が店頭から減っている。農家の方々の仕事が無くなっている。
- ・ 雇用を奪われるかもしれない。

<若者>

- ・ 妊婦・子ども優先。若者もこれから妊娠する可能性があるのに、検査は18歳まで。
- ・ 子どもを産んでいいのだろうか。将来への不安を友達同士でも語れない。
- ・ 大学の中も原発や放射能の話はタブーになっている。

<メディア、情報>

- ・ マスメディアの問題。インターネットができる人、できない人で情報格差。

<必要な支援>

- ・ 必要な支援はとにかく雇用。
- ・ 命をつなぐために福島に力を貸してほしい。具体的な行動がふくしまの不安を救う。
- ・ 原発被災者のための永続的生活補償法を。
- ・ 福島の子ども・若者の将来の治療を支援する国際基金を。
- ・ 福島内みんな疲労困憊。無関心になっている。腰を上げさせる一言を、意見を投げて。
- ・ 福島の一箇所に継続して来てほしい。(女性、子ども、危険は要確認)それが難しくてもまずメル友になってくれるだけでもいい。

また、福島県外の人たちからは、「何かしたいけれど何をしたらいいのかわからない。生の声を聴ける機会がほしい」「無関心からの脱却」「まずは福島の人たちと友達になる」「ここに来られない人たちにこの声を伝える」などの意見も出ました。

生きているから変えられる

2日目の【深める】対話では、福島の方々のお話の中で何度か出てきた、異なる立場の声—子どものため避難を続けたい夫の声、(年老いた父母のため)福島に戻りたい妻の声—を取り上げて、ロールプレイを行いました。子どもたちが作った「家」をモチーフにした切り絵で舞台を造り、最初は二人から、徐々に二人を囲むように色々な人が参加します。

話は「世界最大の産業事故を引き起こしたのは誰だ?」という問いに及びます。

「一経済産業省?政治家?東電?体制側?そう思っているのは幸せだ」

「一実は本当の敵は“自分自身”」

次に、自分の中の「怒り」を体で表現してみると、相手を「刺す」仕草でした。全てを知っていながら事実を隠し、人びとを騙し、多くの人を命を犠牲にしようとしている“相手”に対しての怒り。と同時に“自分自身”をも刺していることに気づきます。体制側に投票してきた私、ふがない私、無関心な私—を罰していました。

「一歴史は繰り返される。人類はこれまで殺しあってきた。今はそれが目の前の相手に変わっただけだ」

「一でも、自分を責めるだけでは何も始まらない。そのエネルギーを未来をつくるエネルギーに変えていこう」舞台の外からも声がします。

ロールプレイは以下のように締めくくられました。

「一亡くなっていった人々に思いを馳せるよ。でも、今、自分はここに生きている」

「一俺は変わるだろうか?自分を信じていいのだろうか?」

「一生きているから、変えられる」

最後に、飯舘村の美しい里山の風景と子どもたちの屈託のない笑顔のスライドショーとともに、「やさしい光」という歌に皆で耳を澄ませました。最後は肩を並べて一つの輪になり、気持ちを共有しました。これから皆で力を合わせて未来を変えていこう。言葉にならないつながりの感覚とともに、微かな希望の光がひとりひとりの心に静かに灯されたような、そんな時間でした。

まとめ

このように私たちは、対話を経て、ひとりひとりのエンパワーメント(自分の内側から力を感じる)、葛藤・疲弊・孤独などの感情から希望を見続け歩んでいこうと願う気持ちへの転換、相互理解と“つながり直し”を体験しました。さらに、深い対話は、参加者に、自分の身近に起きていることと社会で起きている様々な問題とのつながりや、地球規模、または歴史を通じて繰り返される構造的な問題への内発的な気付きももたらしました。

こうした対話の機会は、福島の人々や全国の人々が自ら力を取り戻し、相互理解のもと、未来をともに創る仲間とつながり、新たな行動を生み出す可能性を感じさせてくれました。すでに、参加者の有志でインターネット上で次の行動について話し合いが行われたり、それぞれの現場で動きが始まったりしています。

さらに、こうした動きは、脱原発やそれにとどまらず、本当の民主主義、思いやりのある社会、コミュニティの再生、自治、持続可能性など、これから私たちが目指すものの実現に向けた素地を与えることでしょう。また、他の市民活動とも合流することで、社会を変える市民の取り組みに推進力を与えるでしょう。

ふくしまこそが、これからの日本を、世界を救う鍵を握っているのではないのでしょうか。これからも福島の人々と対話を通じてつながっていき、ともに歩いていけたらと思います。

